

文学と虚実

——古代文学をいかに読むか——

私がついこのあいだまで住んでおりました高台の家は、二階にガラス張りの部屋を造つたものですから、東の方を見ますと月が昇ってまいります。そして、ひよつと振り返りますと西の方の窓にも月が出ております。ちょうどそのところが山の稜線の上でございますので、まるで稜線へ月が落ちかかっているかのごとく感じられます。びっくりして東を見ますと、月がある、また驚いて西を見るとまた月がある。

当然、本当の月は東の月でありまして、それが西側のガラスに映っているだけの話であります。西側の月は嘘。これが本当の嘘つき（嘘月）かもしれませぬ（笑）。したがって私の家には月が二つ出るものですから私は大変うれしく思いましてその家に号をつけました。二つの月の家という、雙月居という屋号をつけまして大変喜んでおりました。

中 西 進

同じようなことをいろいろなところで思うのでありますけれども、たとえば葛飾北斎の浮世絵の中に「甲州三坂水面」というのがございまして、甲州の三坂の富士山を描いているわけでありまして、湖に富士山が映っています。その前に湖がありまして、湖に富士山が映っています。その映っている富士山は、本当の山が夏山であるにもかかわらず、雪を冠った山が描かれております。つまりこれは本当のものがそのまま映っているというのではございませぬ。言ってみれば嘘の富士山がそこに描かれているわけがあります。

お猿さんが水面に映つた月をとらえようとする「猿猴月を捉ふ」という題名の絵もございまして、これはいくら猿が取るうとしたって取れないわけでありまして。水面に映っている月はもちろん、私の家の西側の月と同じで嘘の月で

あります。しかしその絵は大変におもしろい。同じように「この月をとってくれろと泣く子かな」という句がありまして、こういうものはみんな、本当の月ではなかったり、取れない月を取れと言ったりすることを描いたり言ったりしているわけであります。富士山にしてもまたしかりであります。

私は、こういう話を聞いたり、絵を見たりいたしますと、非常におもしろいと思います。たぶん皆様もそうではないかと思うのであります。おもしろいことは、人間、おもしろいですね。

つまりそのおもしろさというのは何かというと、みんな単に事実である以上のものだからであります。西側に映っている月は本当の月ではありません。水面に映っている月も本当の月ではありません。水面に映った富士山も、また、雪山であるのは嘘の富士山であります。そういう、簡単に言ってしまうと嘘と申しましょうか、それを実は今日は虚といたないのでありますけれども、虚に出会う、あるいは虚が語られる、虚が描かれる、そういうことにおいて、人間、大変おもしろく思います。それがそうではなくて、夏富士がありまして、水面にそのまま夏富士が映っている、そういう絵を見ても何の感動も私どもは持ちません。つまり、そうではない何か、嘘という言葉で申しますけれども、

その嘘と呼ばれるようなものを我々は提示されることによって大変おもしろいと思う。そういう事柄が偽らざる実際の姿ではないかと思うのであります。

文学もまた同じでありまして、事実をいくら言われてみてもおもしろいとは思わない。嘘のことを言われると大変おもしろく思う。そういう事が人間にとってごく自然なことではないのでしょうか。そうしますと、今、文献として残っておりますものも、それが特に古典として長い時間の上で残り続けているということになりますと、嘘があるからおもしろくて、みんながもてはやして、今日まで伝わっているんだと、そういうことにならざるをえません。つまり文学というのは基本的に、事実の報告ではありません。文学は、たとえば想像という虚を語るところに本質があります。文学は嘘という毒気をたつぷりと含めば含むほど我々がおもしろいと思うのだろうと思います。

誤解のないように、私が申しておりますことはこれは本当だと思っております(笑)。嘘ではありません。しかし嘘のことに出会うと大変におもしろい。ですから私の話がおもしろくなくても結構でございます。嘘がおもしろいということさえご了解いただければ私の役目ははたせるのであります。

そういう、嘘の重要視といったものを考えますと、私ど

もはいわゆる伝説という形でその虚なるものを取り扱ってきたように思います。たとえば聖徳太子も、最近では聖徳太子という人はいなくなつたんだという説さえありますね。伝説がたぐさんついているというのならまだしも、聖徳太子なんかいなくなつたんだという、これは極論ではないでしょうか。たぶんこの人は一万円札を持つことが少なかった人だと思えますね(笑)。それほど聖徳太子に伝説がいつぱいついています。

たとえば道端で飢えた人を見て、衣をかけたなら、跡形もなくなくなつて着物だけが残つていたとか、いつべんに十人の訴えを聞いたとか、どんな耳をしていたのだろうと思うぐらしいの伝説がたぐさんありますね。こういうものもみんな伝説でありまして、おそらく馬小屋で生まれたというのも嘘であります。午年に生まれたというのも、そんなにうまい具合にいくかなと思うのでありますけれども(笑)。そして亡くなつたのが四十九歳、七十七四十九歳で亡くなつたという。これもまた、なにかできすぎている感じがある。当時は馬が大変貴重な武器であり、財産でありましたから、午年に生まれたなんていうのは大変なこと、蘇我馬子という名前もありますし、東漢直に駒という名前もありますし、駒とか馬とかいうものが当時は大変価値を持つている、そういう時代であります。だいたい厩で生まれたというこ

と自体も私は、今申している言葉で言うとは嘘ではないかと思ふのですね。

また天武天皇という方がおられます。天武天皇もやはり大変に嘘の多い方だと思います。万葉集によりますと、亡くなつた後、伊勢の国にいますという夢のお告げの歌がございますね。これも東海の仙界におもむくのは神仙思想の願望でありますので、この人は神仙世界の、広くいえば、道教的な神仙思想の衣をたつぷりと着た人であります。ですから東の方にしづまつて、瀛真人天皇(おきのまひとのすめらみこと)というふうに瀛という神仙の世界の名前がついております。真人ですから道教で最高の人格ですね。その真人を最高として八色の姓も制定されます。

天武天皇の時代に天皇という称号が木簡として出ておりますが、その天皇というのは神仙思想の最高神の名前でありまして、天皇の呼称のはじまりもまた天武朝の持つていた道教的な傾向を示すものだろうと思われま。九月九日に亡くなつたというのも、これは重陽の節句になくなつたということでありますから、これもどうも私は本当だろうかと思つたりするわけであります。

亡くなつたついでに申せば、天武朝にまず最初の執筆があつたと想定されております歴史書の編纂ですね、古事記とか日本書紀、そういうものの中で天皇が大変長寿を保つ

ております。百六十八歳とか、百五十三歳まで生きたとご
ざいますね。ああいうふうなものも、昔はその年の収穫高
を言ったんだろうというふうな説もございました。あるいは
は、辛酉革命の年を割っていきますとどうも間が計算が合
わないので、長寿にしたんだという意見もございました。

しかし子細に検討しますと、特定の天皇だけが大変な長
寿なんです。それではそれは聖天子かといいますと、仁
徳天皇などはあんなに聖天子でありながら、そんなに長生
きをしていないのです。そうではなくて、まさに神仙的な
人、道教的な人、非儒教的な天皇だけが大変な長寿で書か
れているのです。つまり古代のすぐれた天子たちが神仙の
人になったという考え方からああいう計算が出てくるのだ
ろうと思います。

そういった天武朝に行われたさまざまな事柄、あるいは
天武天皇自身の神格化の中にも大変道教的な粉飾がたくさ
ん窺われます。先ほどの聖徳太子も伝説というたくさんの
着物を着ておりますけれども、その第一の着物を着た時期
は天武朝であります。そして非常に道教的な着物をたくさ
ん着て聖徳太子伝説というものができあがっております。
そんなことを含めまして、やはり天武天皇という人に対し
て、私の言葉で言いますと嘘、もつと正確に申すと虚像と
申しましょか、そういう虚像がいつぱいできてくるわけ

であります。そういうことによつて天武天皇が大変に優れ
た天皇だったと、人格の幅が、どんどん肥つていくわけ
あります。

そうではなくて、ただ単なる人間的な生涯を過ごしたと
いうことだと非常に小さな人生しかそこには語られており
ません。ところが、お釈迦様が生まれながらにして七歩歩
いたとか、生まれてすぐに「天上天下唯我独尊」と言つた
とか、すごい人がいますね。それを聖人と呼ぶようであり
ますけれども、そういつたことをいろいろと語り伝えるこ
とによつて、その人の生涯が非常に大きくなっていくわけ
ですね。おそらくこういつたものはみんな、簡単に言つて
しまえば嘘だということになるのだらうと思います。

今、私は、虚像の誕生ということがいかに必然性を持っ
ているかということをお申しておりますけれども、もう一つ
付け加えて申せば、万葉集の中に仏前唱歌というのがござ
います。仏様の前で歌つた歌ですね。巻八の一五九四番で
あります。そこに左注がついております、この歌は皇后
宮の維摩講で歌われた歌であると書いてあります。この維
摩講、維摩経を講義する講です、維摩講というのは本来は
興福寺で行われるのであります、この年には特別に、光
明皇后の宮で行われた。興福寺で行われるのが通例である
ことが知られております。

その興福寺で維摩講が行われるのは天平五年以降、十月の十日から始まりまして十月の十六日に終わるのです。そして、私は維摩講をなせ十月の十日から十六日の間にするのだらうということが長く疑問でありました。『興福寺伽藍縁起』という本があるのですね。そこに藤原鎌足——興福寺は藤原の氏寺です——その藤原鎌足が斉明二年（六五六）に病臥し、維摩経の法の力によって病気を治すことができた、それに感謝して維摩講を子孫たちが天平五年以降に行うようになったとあります。

しかし、鎌足が維摩経の力によって病気を克服できたというのならば、なにも十月の十日から十六日にやらなくてもいいのではないかと思うのであります。実は十月の十六日というのは鎌足の亡くなった日、命日であります。命日を期して維摩講をするのが興福寺のやり方なのです。そうするとこれはむしろ、維摩様ありがとうということで維摩講をするというよりは、命日を記念して維摩経を講ずるということで、むしろ命日に関わった行事だと考えなければいけません。つまりは、維摩経を唱えて、鎌足の忌日を記念することで鎌足という、藤原の祖先の傑出した人間に対してどのような供養ができるのかということを考えなければいけなくなります。そこで、鎌足はすなわち維摩だという考えがあつて、維摩講を命日を期して氏寺で子孫たちが

行なうのではないかと考えるようになりました。

ご承知のように鎌足は病気になります。そのときに天智天皇が見舞いに参ります。そして家伝によりますと「巨川はまだ渡らず」、大きな川を渡つてないじゃないか、どうしておれ一人をおいて死ぬんだと言つたという話があるわけです。

維摩といえますと、維摩が病気になったときにお釈迦様が文殊菩薩を遣わし、病気を見舞わせたのが大変有名であります。もう維摩というとそれしかないみたいな具合で古代では維摩が扱われております。万葉集でも巻五の中で、たぶん憶良だと思われるけれども、その人が維摩居士も方丈で病んだということ挙げられております。ですから維摩というと病気なんです。そしてその病気のときに何が一番特徴的な事柄かというと、文殊がお見舞いをして、この二人の賢者の問答、これがどういふ問答をするのだろうかといつて鳥も獣たちもいっせいにそこに集まつたという話です。それが大変有名なものとして伝えられております。法隆寺の五重塔の初層、第一層には、四面に塑像によつて、後でいうと曼陀羅のようなものが、要するに一種のテキストであります。描かれております。涅槃があつたり、分骨、舍利を分けるところがあつたりするのでありますが、そのうちのひとつとしてやはり維摩が病気になった、そこに

文殊が訪れた、それをみなが聞こうとしている塑像の一面がございます。全部、これ、共通しているのです。

そういう当時の状況の中で考えますと、あの日本書紀などに書かれている、天智が鎌足を見舞ったということは、むしろ後からできた、それこそ今申しております虚像、嘘かも知れない。その可能性が大変強いと思います。天智はいわば文殊になるわけです。そして鎌足は維摩だということになります。鎌足が聡明だったことは、家伝の中にも、「聡明にして叡哲、玄鑑深遠なり」とあり、幼年にして学を好み、博く書伝に涉ったと書いてありまして、智者の代表として鎌足を考えることがずっと一貫しております。在俗の智者を代表する維摩、それが鎌足だということなのだろうと思います。

中国でも王維、あの詩人の王維が字を摩詰といいますね。これは維摩詰という、王維の維がユイでありますから維摩詰というのをそのまま続けたような字をつけます。王維はちよつと若いので、憶良が中国に参りましたときにはまだ子どもでありまして、出会ったということがございません。残念ながらまだ王維は幼稚園ぐらいの年齢でありまして、会ってはいないのであります。

けれども、やはりこの鎌足が王維だったという、またこれも一つの衣でありますけれども、それを着ている。

天武天皇が神仙思想の真人でした。聖徳太子は、これももう悉達多に匹敵するような、お釈迦様に匹敵するような太子でした。私はそれを素王という言葉で呼んでおりますけれども、王の資格を持ちながら王にならなかつた、それが最大の聖者だというのを素王という言葉で表現いたします。ですから素王としての伝説化というものを聖徳太子に与えているのです。そんなようなことが一連、考えられますので、古代の文献は嘘がたくさんあふれています。このおもしろさ、それを研究すると学問はおもしろいのであります。

さてそれでは、虚はどうしておもしろいのかということを考えますと、そもそも「事実」——虚と実の実であります。このことは近代でも二葉亭四迷が、いくら写真写真といっても、その時にはできない。終つてから書くのだといつています。今、私がここでしゃべっておりますこの事柄も、後の時代であります現在から語られた過去のことであります。人間は未来を語ることはできない。未来の出来事は書けません。

つまり我々が提供されているのは常に過去の事柄だといふことあります。万葉集のものもわかり、古事記もわかり、日本書紀もわかり、靈異記もわかり、みんなこれは現

在のこととして記されていますが、過去のことです。執筆者が過去のことを書いているにすぎないのです。そのことを私は、「事實は倒叙される」という言葉で呼んでおきます。事実とは何かといたら、倒叙されたものだというのであります。つまり後の時代から考えた「事実」が時間のクロニカルな流れの中に入れて事実として書かれているわけです。当然粉飾もあるでしょう。思い込みもあるでしょう。何もない「事実」など、ありえませんが。むしろ叙述されることで「事実」がでかあがるのです。

そうすると、聖徳太子にしましても、天武朝という後の時代から遡って七世紀のはじめの聖徳太子のことを語ったこととなります。この人はお釈迦様にも匹敵するような人だったんだとか、十人の訴えを聞いたそうだとか、そういう話は全部、後の時代に倒叙されたものだというようになります。だから事實は倒叙されたものとして実は、虚をはらまざるをえないのです。

私がここでこういうお話をいたします。幸いなことに皆様がお帰りになってお友だちに中西がこういうことを話したと言ってくださいますと、それは既に今日から先のことを、今日を過去とした段階でお話をしてくださいさっているわけです。それは必ずや嘘があると思います。褒めてくださったのならこれは嘘で褒めているわけです。けなされたら

よけい嘘であります（笑）。そういうものであります。

そういう、事実とは倒叙されたものだという、もうわかりきった、基本的な、ごくごく子どもでもわかるような事柄が忘れられている。まるで神様だけしか書けないような事実として、現在の事実として、書かれているものを事実だと考えてしまう。そういう事柄が研究の基本に誤解としてあるのではないかと思います。倒叙されることにおいてすべての物事が先ほどのような衣を着てしまう。

けれどもそれはまたおもしろいのであります。なぜおもしろいかといいますと、事実そのままではおもしろくない。ここに水差しがありますけれども、これを見たら腹を抱えて笑う方がいらつしやいましょうか。ありませんね。だけど「ごらんさい。透明なタコが座っています」なんて言ってみると、嘘だと思えますけれども、これは一つのおもしろみとして提供された事柄であります。今は思いつきですからそんなことしか言えませんが、たとえばそういったような事柄があるわけです。

さて、今までが第一の話でありまして、虚がおもしろいという話をいたしました。二番目に、これから申しますのはその嘘のつき具合、事実として嘘のつき具合とか、どのように虚がまつわりついているかというお話を事例としてお出ししたいと思います。

三つばかり申し上げたいのでありますが、その一つ、例の十市皇女という人が亡くなります。そしてそれに対して高市皇子が挽歌を三首歌います。まず「神山の山辺真麻木綿短木綿かくのみ故に長くと思ひき」など二首あります。ところがその最後のところに「山振の立ち儀ひたる山清水酌みに行かめど道の知らなく」というのがついております。そこで全体三首で、そのまま読みますと十市皇女が亡くなったときに高市皇子がその三首の歌を作ったんだと、こういふふうにかえられてしまうわけです。

ところで、山吹の花というのは万葉集の中で十七首出てまいります。この十七首の中で時代、背景がわからないものが三首ございますから、それを除きますと十四首になりますけれども、その十四首の中で今の十市皇女の哀悼の歌以外はすべて天平時代の歌であります。そうなりますと山吹の花を歌の題材として詠むようになったのは天平期から以降だといふふうにかえるのが順当な手続きではないかと考えます。

そうしますと、はたせるかな、山吹の花が生命の花であるという、これを一番信奉したのが橘諸兄であります。橘諸兄は井手の自分の家の山荘、後の時代、新古今時代などには「井手の玉水」という歌枕になります、その井手という所に別荘を構えて、池を掘ってその堤に山吹をいっば

い植えたという伝説がございます。まさにこれがペルシャに伝えられた西方の生命の花の伝説であります。そういうものが日本で享受されるのはやはり諸兄の周辺であろうと思われまゝです。ですからこれをどうも十市皇女の亡くなったときまで遡らせるということには大変な無理があります。

ですから、本当は二首の歌があつた、そこに天平期になつてからもう一首が加わつた。三首はさりげなく並んでいゝるわけでありませうけれども、実はそうではない。倒叙の現在点というのが天平期であつた、その天平期から遡つて書いたものがその三首だつたんだということになります。

ですから、天武年間に十市皇女が亡くなつた時のそのまゝの歌として理解することは正しくないということになります。正しくもないし、おもしろくもないのです。これが天平期になつてそういう伝説が付け加えられたんだと、彼女を訪ねて生命の泉の国へ行きたい、これはギルガメッシュ伝説などにも登場する伝説でありますから、そういうところへ行きたいと思つたけれどもその道を知らないのだという歌がくつついていゝるということにおいて、十市皇女という、悲劇のヒロインが亡くなつたときに、この人の命を取り戻したいと思つた恋人はそこまで行きたいと思つたんだという想像が後々の時代に付け加わつてきて、十市皇女はまだ天平時代には死んでいなかったということになるわ

けであります。

そういったようなことを含めまして後々の衣を着ている。これは巻二でありますから、いわゆる原万葉と呼ばれているものでありますけれども、原万葉と呼ばれる巻一や巻二にしましても、たとえば平城京の遷都の歌が「或る本」として出てまいります。藤原京から奈良京に移ったときの歌というのが「或る本」としても付け加えておりますけれども、そこでは天皇という文字を使っております。天皇という文字は、七二四年、神亀元年、つまり聖武天皇の時代にならないうと歌の中では使わない文字遣いであります。ですから巻一の中にも神亀・天平期の史料が入っているということであります。これが「或る本」であります。巻一や巻二の「或る本」とか「或るはいはく」とかいうのはそのような考え方をしなければ整合性がない。むしろ家持時代の筆さえその中にはあると考えないといけない、そういう例でございます。

もう一つ例を挙げますと、先ほどは山吹でありましたけれども今度は柳であります。柳は三十六首に登場しますが、人麻呂の歌集の中には、柳を詠んだ歌が、作者が絹と呼ばれる人を含めまして三首出てまいります。ところが柳というのは、先ほどと同じように年代推定が不明なもの巻十三の一首、巻十四の五首の六首除きますと、後のものはすべ

て天平二年以降の歌に登場いたします。川柳、春柳、全部含めまして登場いたします。

人麻呂の歌集の中の柳の歌の中には例の葛城山の歌、「春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしぞ思ふ」があります。阿蘇瑞枝さんが非常に優れたご意見を出されて、略体歌、非略体歌ということを申されました。それ以後、大きく学界はそのことを基軸として進んでまいりましたけれども、その典型的な略体歌であります。その中に柳が登場いたします。

すべてが天平時代以降のものにあるのですから、いや、これだけは違うんだよと、もつと別のものとして考えなければいけないよと言うにはそれだけの理由がなければなりません。そんな無理をするのはやはり私はきらいであります。学問にとっての大敵は、無理、不自然であります。真理というのは常に自然であります。ですから常に自然に出てきた結論は、出してみるといろいろいるものがそこに吸い付いてくるという格好でありまして、そうでないものはどこかぎくしゃくしているものでありまして、これは誤りであります。

真理はごくごく身近なところに隠れている。遠い彼方にあるのではなくて、ごくごく身近なところに気がつかないで転がっているんですね。そんな遠くにあるのではありま

せん。遠くを追いかけてみたって研究は成り立たないと思
います。だからあのカール・ブッセという人は研究者には
なれないと思いますね(笑)。そういうことがやはり学問
の要諦だと思います。

そうしますと、「春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても
妹をしぞ思ふ」というのは、これは家持周辺の歌だと、そ
う考えてしまつたほうがよほど楽であります。無理をしな
くて済むのです。「そんなこと言つたつて人麻呂の歌集に
あるんだよ」と言われたら、それではみなさん、『三十六
人集』をご覧なさい。『三十六人集』の中には人丸集も家
持集も赤人集もあるけど、それは本当の人麻呂や家持や赤
人の歌ですかといつたら、だれも「いや、それは違いま
す」とこう言うんですね。「あしひきの山鳥の尾のしだり
尾のながながし夜をひとりかもねむ」などというのだつて
『三十六人集』からのもので、「かささぎの渡せる橋にお
く霜の白きを見れば夜ぞふけにける」というのも『三十六
人集』からのものです。みんな万葉集の歌ではありません。
それが人麻呂だ家持だという名前で世の中では流布してい
るわけであります。赤人集というのは巻十の一部ですね。
そういうふうなものでありまして、これはもう本当の赤人
が詠んだとか、人麻呂が詠んだ、家持が詠んだというもの
ではない。『三十六人集』はそういう後世のものだと認知

しながら、万葉集に入っているものだけがなぜか本当のも
のだ、その名前のおりのものだと、こういうことになつ
ているわけであります。私はむずがゆくてしようがないで
すね。もつと自然に後のものがいくつ入つていたつてかま
わないということだと思います。

このいわゆる略体歌というふうなものが「てにをは」を
省略した歌というふうにつまみつかれておりますけれども、そ
うではないのですね。簡単なものが、省略の結果そうなつ
ているのか、最初から書かないのか、そういうことがどう
も私の見る範囲では検討されていないように思います。た
だ書けなかつたといわれているだけのようないたしま
す。そうではなくて、あれは見た目にも美しい、いかにも
漢詩ふうなものだという意見、これはもう五十年ぐらい前
の意見なんです。そこへ戻つて考えないといけないのだ
と思うのです。

人麻呂の歌集だと書かれているけれども、それは後の時
代から書かれています。だといふその倒叙された事実、たつ
た一つそのことをお考えください。今のようなことはい
ろいろと解けてくるのではないかと思うのであります。

今日は主として、これから研究を志すお若い方に申すの
でありますけれども、先ほどの、事実は倒叙されたもので
すということ、そして今の第二の話に対しては、例外

を大事にしてくださいということでありませぬ。これは例外だというふうにして無視してしましますと何も発言権を持ちませぬ。そうではなくて、例外こそ大事にしましょうよということをお願いしたいと思います。

以上挙げましたものは実はみんな、白鳳期の例です。ではどうして今私は白鳳期の事柄を取り上げたのか。これは故意に取り上げたわけではございません。倒叙された事実である、あるいは虚なるものが最も多い、それは倒叙されたからだということを示しましたけれども、そういう倒叙が著しい傾向を最も持っている万葉集の部分、それはどこかと申すと、これが白鳳のものなのです。白鳳時代がその倒叙された事実を一番たくさん持っております。

それではそれはなぜかということを考えなければいけません。これは大変わかりやすいことでありまして、そもそも万葉集がどのようにしてできあがったかというだけの話であります。先ほど天武天皇の時代が話題になりましたけれども、その天武朝を後の時代からあこがれて、天武親政をもういつべん具現したいと思つた天皇がいらっしゃいました。それが聖武天皇です。聖武天皇が自分の政治を行ううえに規範とすべきものは何かといったら天武朝だったということなのです。

これはわかりやすい話でありまして、聖武天皇の周りに

は藤原氏の勢力がいつばいネットワークを張り巡らしております。その中からなんとか天皇親政をつかみ出そうというときには、あの天武天皇がやったような、たとえば舎人だけを重用するとか、大臣はいつばい任命しないとかいうあり方、天皇親政のあり方が大事です。そして天武天皇の時代というのは実は何かというと、聖徳太子を大変尊崇した時代であります。だから三段階になっているのです。聖徳太子の時代が第一の黄金時代、それを黄金時代と認識したのが天武朝、それをまた黄金時代と考えたのが聖武時代という、三段跳びをしている。万葉集の構造は非常に単純であります。ですからその天武朝をまねしようとしたのが聖武天皇の時代だとすると、その天武朝を折り目として、パタンと二つ折りにするとピタツと重なってくる、それが万葉集であります。二つ折り万葉集の見方が、今申し上げたようなことです。

二つ折りだと申しました。そうしますとその聖武朝の意志に全部、白鳳時代が反映するわけですね。もしこれが吸い取り紙だったら白鳳時代を吸い取るわけです。また同時に、こちらの聖武朝の考え方、理想像というのがまた天武朝のほうに吸い付くといつてもいい。その吸い付いた滓というのが、先ほどから申し上げている例外として人麻呂の歌集などが持っているものであります。

お互いにくつつき合っているのですね。それが二つ折り万葉集であります。万葉集は昔は大変難しかったのですけれども、今考えてみると、大変わかりやすいと私は思っております。

たとえば赤人という人が登場いたします。山部赤人という人はなにか人麻呂のエビゴネンのようにいわれておりますね。大変評判が悪い。吉野の従駕の歌だつて何だつてみんな、人麻呂のまねをしてるじゃないかということであります。これは赤人にとつて濡れ衣であります。そうではなくて、聖武天皇が、新しい人麻呂を探した、そして見つけたのが赤人。だから赤人に課せられた宿命は人麻呂のまねをすることであります。

そうすると当然人麻呂と同じことを歌わざるをえないわけですね。吉野従駕にしましても何にしてもそうです。しかしそれを外してしまつた、巻八にあるような赤人の歌、「明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ」とか、「春の野にすみれ摘みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜寝にける」という、これは全然人麻呂と似ていないのです。これが本当の赤人の歌であります。そのほかに聖武天皇から要求された新人麻呂が同じようなエビゴネンとしての歌を作るといふ無理をしてみましょう。引き裂かれた赤人像がなぜできあがるのかというと、そういうこ

とであります。

そんなふうには聖武天皇の時代というのは白鳳の贊美、白鳳の再現の精神に充ち満ちております。そこで白鳳時代に對する思い入れが強くて、人麻呂の歌集などというようなものを享受しようといたします。ですから例外もそこに入り込んでいくことがありました。それからまた、まずなによりも人麻呂の歌、あるいは人麻呂の歌集というものを尊重しようという、これがあるわけです。しかしその人麻呂の歌集は聖武朝に考えた人麻呂の歌集でありますけれども、それを尊重しようと。だからまず巻頭に人麻呂の歌や、人麻呂の歌集を置いて、自分の歌を、あとの歌を並べるということが起こつてくるわけです。ですから前半の二つ折り万葉集のその最初のものというのは、やはりどうしても人麻呂を継ぐという精神があつたと思ひます。

万葉集の編集もそもその出發はそのあたりにあつた。聖武天皇がもう太上天皇ですね、孝謙天皇の時代ですが、そのころから始まつた。私はもう何十年も前に巻十九の最後のところと『栄華物語』の記述を問題にしまして万葉集の編纂論を書きました。私は、今の二十巻だけでありませんでもつとほかのものもあつたと考えておりますけれども、少なくとも今の二十巻も含めまして、その出發は聖武天皇の勅命で起こつたというふうを考えるべきではないかと思

うのです。

そんなようなことを考えますと、聖武朝における人麻呂の偶像化とか、人麻呂の歌集の尊重とか、そういったものが全部わかってまいります。当時の歌集は日々生成しますから、柳の歌が入っていると、山吹の歌があるとか、そういうふうな白鳳時代のものも自然に全部解けてくるということでありませぬ。

そろそろ結論を申し上げなければいけないわけでありませぬけれども、古代文学をいかに読むかという私の掲げましたテーマに対して、私は次のようなことを申し上げたい。今日最初に申し上げましたおもしろさ、それを追求すべきだということですね。一番最初に申しました。

それではそのおもしろさというのはどこにあるのかといったら、これは、事実が倒叙されることにおいて生じるおもしろみでありました。事実には事実ではない。倒叙された「事実」によって生じるおもしろみというものがあります。ぜひ、例外をキーとして、その倒叙のされ方を考えていただくことが必要なのではないかと思うのです。そのことによって事柄の全域がわかります。人麻呂なら人麻呂が生身としてどういうことを考えたか、それが後にどう受け継がれていったのか、どういうふうな形に変形していったのかという全域がわかります。その全体の倒叙された事実

の集積、倒叙された事実がすべてであります、それが集積するわけですね、その中には嘘がいっぱい入っています、だからそれなりにおもしろいわけでありませぬ。そういうものは、人麻呂なら人麻呂という個人を離れて、もつと人間の普遍の問題を我々に訴えかけてくるはずです。たとえば聖徳太子がなぜ天皇にならなかったか。これはなれなかったのではなくて、ならなかったのです。なぜならなかったのかというように、そういうことが当然起こってまいります。これはお釈迦様と同じであるというふうなスタンスで理解できるわけです。そうするとそれは人間、あるいはこの世界の世相の普遍を我々に訴えかけてまいります。

そうなりますと、ただ単に中西の家は月が二つあるのか、おもしろいなあとか、お猿さんがありもしない月を取ろうとしていて、お猿さんつてばかだなあという、そういうおもしろさだけに終わりませんで、もつと人間の普遍が抱くところの何ものかに、研究者は突き当たるはずであります。それを提供していただくことで文学はいまだに我々の文化遺産として第一等の地位を持ちうると思うのです。

人間普遍の姿を、読者にあるいは社会に提供するということにおいて文学はみずみずしい生命をもって読者に訴えかけると思うのです。

ですから一つの比喩で申しますと、私はおもしろさから

出発してくださいと申しました、しかしその最後にぶつかった姿が人間普遍のものだとしたら、それは何かしみじみとしたものを持っているはずですね。松尾芭蕉という俳人が大変いい句を作ってくれておりまして、「おもしろうてやがてかなしき鶉舟哉」というのがあります。やはりおもしろから出発して、やがてかなしきに到達する、それが文学の研究ではないかと思うのであります。「おもしろうてやがてかなしき……」あるいは「書斎哉」でもいいんですね、みなさん。「おもしろうてやがてかなしき鶉舟哉」、これが文学の研究ではないか、そのように古代文学を読んではいかがということですよ。

ご清聴、ありがとうございました。(拍手)